# HCニューズレター

No.11

Human Care News Letter

2010年3月 日本ヒューマン・ケア心理学会


# ケアとコミュニケーション

## 第11回大会報告


東北大学大学院情報科学研究科認知心理情報学　岩崎 祥一


第11回日本ヒューマン・ケア心理学会は、東北大学大学院情報科学研究科岩崎祥一と大学院教育学研究科安保英勇の共催にて平成21年7月19・20日に、東北大学文科系総合研究棟にて開催させていただきました。地の利がいいとは言えない仙台での開催でもあり、また本年度の開催日はこれまでの9月初旬から梅雨の最中の7月中旬となったため天候も心配されましたが、幸い50名を超える方にご参加いただくことができました。講演やシンポジウムでご講演いただいた先生方をはじめ、大会にご参加いただいた方々、及びスタッフとして準備や運営を支えていただいた大学院の学生さんなど、多くの皆様のご協力により、こじんまりとしてはいましたが、まとまりのある有意義な大会になったと感じております。あらためて、ご協力いただいた皆様に御礼申し上げます。

本大会は、「ケアとコミュニケーション」をテーマに開催されました。ケアの現場は、人と人の交流の場として特に心のつながりがその基盤となっております。心が通い合うケアをめざしてどのようなコミュニケーションがあるべきコミュニケーションの姿なのか、という問題は、ケアに携わる方はどなたも日頃考え、悩んでいることではないかと思われます。今回の大会がそうした日常のケアに少しでもお役に立てることができれば、主催者としてもこれに勝る喜びはありません。

大会は、招待講演者として、昨年まで国立国語研究所の上級研究員をされていた吉岡泰夫先生(別府大学大学院文学研究科)をお迎えし、「良好な患者-医療者関係を築くコミュニケーションとは」と題してご講演いただきました。さらに、教育講演としては、東京慈恵会医科大学の野呂幾久子先生から「インフォームド・コンセント説明文書を分かり易くするには」と題して、医療現場で用いられている具体的な説明文書を分かり易くするにはどのような点を考慮すべきかについて、具体的な提言をいただきました。さらに、「ケア現場でのコミュニケーションを巡る諸問題」と題したシンポジウムでは、精神科医としてのお立場から上埜高志先生(東北大学教育学研究科)に、看護師としてのお立場から清水裕子先生(香川大学医学部)に、さらに薬剤師としてのお立場から奥野雅子先生(東北大学大学院教育学研究科)に、それぞれケアの現場で遭遇するコミュニケーションを巡る具体的な問題やそれに対する提言などをいただき、参加者との質疑応答を通してこの問題に一層の理解を深めることができました。

研修会では、淑徳大学の木村登紀子先生より、先生の近著をベースに「事例研究の進め方 ―方法論を踏まえての検討―」と題して、事例研究の方法論を中心にお話しいただきました。

口頭発表やポスター発表では、ベテランの先生方に混じり多くの若い会員の方の熱心な発表により大会を大いに活気づけていただけました。



東北大学文科系総合研究棟



招待講演

## 「良好な患者-医療者関係を築くコミュニケーションとは」

別府大学大学院文学研究科　吉岡 泰夫

近年、安全で信頼される患者参加型医療の実践が提唱され、社会からの要請も高まっている。その実現には医療コミュニケーションの適切化が不可欠である。

科研費研究グループで、熟練医師の実際の診療場面のジョブレビューおよび参与観察に基づいて、Ｂｒｏｗｎ＆Ｌｅｖｉｎｓｏｎ(１９８７)のポライトネス理論を応用した医療コミュニケーション教育プログラムを開発した。医療コミュニケーションの適切化に貢献するポライトネス・ストラテジーを中心とする教育プログラムである。

患者のポジティブ・フェイス(親近欲求)を満たすように働きかけるポジティブ・ポライトネス・ストラテジー(親近方略)は、Ｂ＆Ｌの15より1つ多い16ストラテジーである。

患者のネガティブ・フェイス(不可侵欲求)を脅かさないように配慮するネガティブ・ポライトネス・ストラテジー(不可侵方略)は、Ｂ＆Ｌの10より3つ少ない7ストラテジーである。

ポライトネス理論を応用した医療コミュニケーション教育プログラムを用いて、S国際病院の内科後期研修医５人を対象に、教育介入研究を実施した。教育を受けた研修医が、外来診療でポライトネス・ストラテジーを効果的に活用できるようになったか、受診した患者による評価、研修医の自己評価、指導医の評価によって総合的に評価した。目的は、この教育プログラムの医療コミュニケーション教育への有効性を評価し、改良に役立てることである。

三種の評価を分析した結果、医療ポライトネス・ストラテジーを中心とするこの教育プログラムは、医療者のコミュニケーション・スキルの向上、および患者満足度の向上に貢献することが確認できた。また、「診察室のドアを開けて、マイクを使わずに患者を呼び入れる」、および、「電子カルテ入力中にも患者への適度なアイコンタクト」という非言語行動によるポジティブ・ポライトネス・ストラテジーが実行された場合、患者満足度は顕著に高くなることが分かった。



特別講演 吉岡 泰夫先生

教育講演

## 「インフォームド・コンセント説明文書を分かり易くするには」

東京慈恵会医科大学医学部
人間科学 日本語教育研究室　野呂 幾久子

近年、日本の医療コミュニケーション分野では、診療場面での患者-医師の会話(口頭によるコミュニケーション)については徐々に研究・教育が行われるようになってきたものの、インフォームド・コンセント説明文書(ＩＣ説明文書)のような文字によるコミュニケーションについてはあまり関心が向けられていない。しかし、欧米では、ＩＣ説明文書が難しすぎて患者が理解できない、リスクなどの情報を知ることで患者の不安感が高じることがある、などの研究結果が多数報告されている。講演では、以上の知見を紹介した後に、講演者が行ったいくつかの研究結果に基づき、①日本のＩＣ説明文書にも同様の問題点が見られること ②文書が分かりにくいと患者の不安感が増したり医療者への不信感につながったりし易いこと③ＩＣ説明文書を患者にとってより適切なものに改善するためには、まず文書を分かり易くすること(文章を易しくする、レイアウトなどを見やすくする、患者の立ち場に立って必要な情報を不足なく含めるなど)が必須であり、その上で患者の情緒に配慮した記述(患者を安心させる、パートナー関係を示すような記述)を加えることが効果的であること、などについて述べた。フロアの先生方から、本研究に関するご意見や社会的な意味での期待が寄せられた。



教育講演 野呂 幾久子先生

第11回シンポジウム

## 「ケア現場でのコミュニケーションを巡る諸問題」

東北大学大学院教育学研究科　安保 英勇

本シンポジウムは、大会2日目の午後、およそ2時間に渡って行われた。シンポジストは、大学勤務の傍ら医療職としてのご経験のある方々であった。

上埜先生は、医師の立場から、医師-患者間における知識の非対称に由来する困難性、また医療者間では専門用語の違い、日々生まれる新たな医療用語を巡る問題などが報告された。清水先生は、看護師の立場から、認知症患者とがん患者に対して、その病状に対応したケアの重要性について報告し、看護教育において実践されているマイクロカウンセリングを用いた実習についても述べられた。奥野先生は、薬剤師の立場から、患者の服薬に対する合意を得るための「解決志向アプローチ」について提案された。三氏の報告の後、コメンテーターの志賀先



シンポジウムの様子

生に大変丁寧なコメントをいただき、閉会となった。

時間の関係上、フロアとのやりとりを十分行うことはできなかったが、終了後に個別の活発なやりとりが見受けられ、参加者の関心の高さが窺われた。

研修会

## 「事例研究の進め方 ―方法論を踏まえての検討―」

淑徳大学総合福祉学部　木村　登紀子



研修会 木村登紀子先生

研修会は24名の参加者を得て、2時間30分にわたって行われた。研修会は、講師が、これまでの研究を集大成して出版したばかりの「つながりあう『いのち』の心理臨床：患者と家族の理解とケアのために」（新曜社）を主な題材とした内容であった。単なるパワーポイントの説明にとどまらず、膨大な資料が配付されたために、参加者から内容をより容易に理解できたという感想が、随所で聞かれた。内容はきわめて密度が濃いものであったので、ここで、短くまとめることはやや困難を感じるが、無理を承知で要約すると、ヒューマン・ケアにおける事例研究は、個人（個体）に対するアプローチだけでは不十分で、個人をみる視点と同時に、それをとりまく集団への目配りが欠かせないというユニークなものであったと言えよう。

なお、今回から研修会参加者には修了証が発行され、終了後には大会長からの授与式があった。

（広報担当　廣瀬　清人）

第2回日本ヒューマン・ケア心理学会研究奨励賞

## 受賞者を代表して

大阪市立大学大学院看護学研究科　石井　京子

第2回日本ヒューマン・ケア心理学会研究奨励賞の受賞の栄誉に預かりましたことを、心より光栄に思っております。

私たちは、高齢社会における家族のケアのあり方を模索し、看護師としての見方と心理学を学んだものがともにその長所を生かせるような研究のあり方を探ってきた。高齢社会では介護問題は避けては通れない課題であり、多くの研究が積み上げられている。その介護の先には看取りという課題があるが、実証的な研究として取り上げることが少ない問題であった。しかし、私たちが行うことができる最後の援助として、どのようなケアを行い、また対象はどのようなケアを望んでいるのかなどを明らかにしてゆくことは、今後の高齢社会を豊かなものにしていくためには重要な問題である。

今回の配偶者への家族の看取りケアの分析から、"直接的介護行動"（"死の受け止めに対する援助"）"情緒的援助行動"と命名した3因子を抽出した。その行動に関連する要因は第1因子には苦痛の緩和を主体とした治療方針の選択、第2因子には看取りの受け止めであった。また、死の受け止め援助を多く行ったと認知している家族のほうが看取りに満足感を表していることから、亡くなって逝く人の意思を尊重した十分なかかわりが持てたことが看取りを受け入れやすくするといえる。また、看取りの受け止めは死亡場所ではなく、どのようなかかわりをもてたと感じているかが重要であった。

この受賞をきっかけに、さらに新たな視点からのケアの検証を行ってゆきたいと思っている。



石井 京子先生

## 受賞論文の講評

第2回日本ヒューマン・ケア心理学会研究奨励賞は、第6号に掲載された石井京子氏・近森栄子氏の「配偶者への看取り時の介護行動に関する研究」に決定した。

本研究は、看取りの経験者を対象に看取り時の介護行動について調査研究を実施している。その結果、配偶者への家族の看取りケアの分析から、"直接的介護行動"（"体位交換する"「マッサージする」など）"死の受け止めに対する援助"（"看取りに関する希望を聞く"「死について話し合う」など）"情緒的援助行動"（"いたわる言葉をかける"「はげます言葉をかける」など）の3因子を抽出・命名した。苦痛の緩和を主とした治療方針を選択した人たちのほうが、直接的な介護行動が多かった。また、看取り後の受け止めで「充分に行った」と認知しているほうが死の受け止めに対する援助が多かった。情緒的な援助行動では、そのような影響要因は見出されなかった。また、看取りの受け止めは死亡場所ではなく、どのようなかかわりをもてたと感じているかが重要であった。

高齢社会における介護という現代的で重要な問題を取り上げ、その先の看取りというケアがどのようにあるべきかについて、実証的に取り組んだ研究である点が高く評価された。

（審査委員長　遠藤　公久）

# 日本ヒューマン・ケア心理学会学術集会
# 第12回大会のお知らせ

日程…　2010年7月18日(日)・19日(月)

会場…日本赤十字看護大学(広尾キャンパス)

**メインテーマ…「つながりあう〝ケア〟」**

特別講演(市民公開講座)　日野原 重明(聖路加国際病院理事長・名誉院長)
「人と人との絆に流れるいのちについて」

教育講演　川嶋 みどり(日本赤十字看護大学看護学部長)
「今だからこそ、ケアの真価を求めて」

シンポジウム
「つながりあう〝ケア〟」

研修会　講師　木下 康仁(立教大学社会学部教授)
「質的研究法M-GTAの独自性と分析技法」

スケジュール
1 大会案内の送付　　2月下旬
2 演題申し込み(払い込み)　締め切り…4月23日(金)
3 予約参加申し込み(払い込み)　締め切り…4月23日(金)
4 抄録原稿提出　締め切り…5月14日(金)

第12回 大会準備委員会委員長…木村 登紀子(淑徳大学)
副委員長…遠藤 公久(日本赤十字看護大学)
事務局長…廣瀬 清人(聖路加看護大学)

**事務連絡先…聖路加看護大学　廣瀬研究室気付**
**「日本ヒューマン・ケア心理学会」第12回大会事務局**
**電話・FAX／03-5550-2277**
**大会専用アドレス e-mail: jhc12@slcn.ac.jp**
※原則として連絡は専用メールアドレスにお願いいたします。
メールを使用できる環境にない場合のみ、FAXをお使い下さい。

＊予備的な研究やさまざまな実践などについても、積極的にご報告いただき、活発にディスカッションする機会になればと考えております。ぜひ、多数の皆様の発表の申し込みと、ご参加をお待ちしております。
＊大会行事などの詳細は、すでにご案内の1号通信で、ご確認ください。

## 「ヒューマン・ケア研究」投稿論文募集

「ヒューマン・ケア研究」は2009年度より年間2回の発行になりました。それにともない執筆要領が改訂されました。原稿は常時受け付けておりますので、新しい執筆要領をお読みのうえ、積極的な投稿を期待しています。詳細は学会事務局にお問い合わせください。

(編集担当　遠藤 公久)

## Web担当からのお知らせ

ヒューマン・ケア心理学会のホームページも少しずつ充実してきております。現在、掲載されている情報以外でもWebに掲載を希望する内容がありましたら、私あてに、お知らせ下さい。

現在、「ヒューマン・ケア研究」掲載の各論文(2000-2009)がWebからダウンロードできます。ご利用ください。その際、以下のIDとパスワードの入力が求められますので、入力をお願いします。

ID：HCkaiin2010　パスワード：bwcz2212(大文字、小文字は区別されます)

なお、このID及びパスワードは、4月1日より有効となります。それまでは現在のID及びパスワードをお使いください。

(Web担当　岩崎 祥一)

## お知らせ

常任理事会では、これまで研修に参加された皆様に修了証の発行を検討しております。当初数年間は、必ずしも明確に参加者を把握していなかったこともあり、若干、参加記録に不備がある可能性がございます。お手数ですが、ご希望の方は、参加された大会名称と研修会名、研修内容(講師名)をご連絡先に添えて、学会事務局までお知らせ頂きたくお願い申し上げます。

(研修担当　長田久雄)

## 編集後記

学会学術集会が始まってから、干支が一巡することとなりました。記念すべき第12回大会が、7月18日、19日に日本赤十字看護大学(広尾)で開催されます。都内での開催は桜美林大学での第7回大会以来です。2つの講演を始めとして、大会委員長はじめ、力と知恵をしぼって学術集会の企画・運営をしております。会員の皆様方におかれましては、ぜひともご参加・ご発表くださいますよう、お願い申し上げます。

(広報担当　廣瀬 清人)


**●学会へのお問い合わせ、連絡と「ヒューマン・ケア研究」への論文投稿は左記の事務局にお願いします。**
〒113-0033
東京都文京区本郷2-38-14　TKビル5F　プライムアソシエイツ気付
日本ヒューマン・ケア心理学会　humancarepsy@primeassociates.jp
Tel／03-5805-0527　Fax／03-3812-5187